

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告
最終報告提出日:2013年2月2日

派遣生氏名: 菊地 重仁
派遣時所属: ミュンヘン大学歴史学科
派遣形態: PD

研究課題: カロリング期における王権による自己表象と宮廷外における王権像との比較研究（初期中世文書コミュニケーションにおける君主の尊称 その2）

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

受入研究機関: モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ (= MGH、ドイツ・ミュンヘン)

(2) 派遣期間 2012年7月21日~2013年1月16日(総日数:180日)

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

本研究は王の自己表象としての国王文書中の尊称の分析を手がかりに、カロリング期政治文化の新たな一面を明らかにすることを主たる目的とし、尊称として用いられたそれぞれの徳性に込められた意味の概念史的分析、特定の尊称の使用を政治的文脈の中に位置づける試み、および各君主の尊称のレパートリー・尊称毎の使用の頻度などの分析から、それぞれの宮廷が発信を試みた王権のイメージの傾向、差異を探ることなどを課題とする。

(2) 実際に達成された成果

a) 派遣期間中は派遣先であるMGH、ミュンヘン大学およびバイエルン州立図書館の豊富な蔵書を渉猟することに主な研究時間を費やした。その際、国王文書とそのコミュニケーション的な側面をよりよく理解するための比較対象として書簡に注目し、この史料類型についての知見を深めることと、国王宛書簡における宛名としての王の尊称の調査を行なった。また以上のような個人での研究活動に加えて、MGHおよびミュンヘン大学の研究者たちと研究課題について話し合う機会が得られた他、文書形式学の第一人者テオ・ケルツァー教授（ボン大学）とコンタクトをとり、本研究への助言をもらうことができた。

b) 前回派遣時の研究成果である論文の査読結果を受けて原稿に加筆・修正を行ない、出版社に入稿した。本論文“Representations of monarchical ‘highness’ in Carolingian royal charters”は*Problems and Possibilities of Early Medieval Charters*, edited by Jonathan Jarrett & Allan Scott McKinley (International Medieval Research 19), Turnhout: Brepolsに収録され2013年中に刊行される。

(3) 今後の研究展望

本研究を今後さらに深めていく方向性の一つとして、国王宛書簡のみならず、書簡全般を視野に入れることを考えている。初期中世書簡一般（とはいえ伝来しているものの多くは聖職者の筆によるものであるが）における自称・他称としての尊称用法を調査し、これまでに行ってきた王の尊称についての研究成果と照らし合わせることで、より深い考察が可能となるだろう。また書簡に関しては、後期古代および同時代のビザンツにおける尊称用法との比較も可能である。なお書簡における自己表象および呼び名の問題については、2013年6月にフランス・ポワティエで開催される国際研究集会において報告する予定となっている。